

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese di Kyoto

留学体験記： シエナ

* 中世の祝祭的な街シエナで学んで *

杉政 唯実

私はここ8年ばかりイタリアの人々、文化、風土に魅せられて、夏のバカンスごとにイタリア各地を旅し、またそのうち数回は暮らしてみたくてミニ留学を経験してきました。2009年は、その私にとってもイタリアをより深く知ることのできた年でした。ついに念願かなって、3か月という長期でシエナに滞在し、ダンテ・アリギエリ校で学ぶことができたのです。しかも7月から9月いっぱいまでという、この地のパリオが二回も(毎年7月2日と8月16日)経験できて、街が祝祭的に輝き続ける期間に滞在することができたのです。



【シエナ カンポ広場】

シエナはペルージャと並び外国人大学のある街で、各国の学生が一番美しいイタリア語を習うためにやってきました。若い学生たちは駅近くの大きな校舎の大学へ通っている人が多かったのですが、私が選んだのは、大人も数多く学びに来ている、世界中に語学学校を展開している伝統校

ダンテ・アリギエリ校でした。各国のダンテで学ぶ大人のリピーターが多かったです。

この学校はシエナの城壁内の旧市街の中でも最も古い地域、カステル・ヴェッキオ地区にあります。7月のパリオの優勝コントラダ(パリオ参加の地区単位の団のこと)であるタルタルーガ[亀]地区の通りの奥にありました。シンボルである亀をかたどった泉があり、美味しい水を観光客も、学生も、地元の人も汲む光景がしょっちゅう見られましたし、パリオで優勝したということもあり、通りには誇らしげに亀の旗がずらっと翻り、優勝した決定的瞬間の馬と騎手の大きな写真が空中に飾られていました。初日に学校を見つけたとき、私はこの光景に身が震えるほどの嬉しさを覚えました。なぜって、8年前、初めてシエナを、しかもパリオの日に、一観光客として訪れ、無我夢中でパリオの興奮の渦に呑みこまれて圧倒的なインパクトを私に与えたときも、この亀コントラダが優勝したのです。そして翌日はシエナの街のあらゆる通りにこの旗一色が翻り、このコントラダのパレードが誇らしげに街を練り歩くのを感激して見たので、私にとってこの亀のシンボルはシエナという街に重なって心の中に存続していたのでした。おまけにこのマグカップまで記念に買っていて毎朝使っていたのです!

ええ? 学校に辿りつくってことは亀のもとへ通ってこと?? みたいな妙な運命感がありました。私は城壁の外の郊外住宅地、バスで10分ほどの鉄道駅の向こうに広がるトスカーナの自然に包ま

れた住宅に間借りしていました。大家さんは生粋のシエナ人ですが、30年もロンドンで暮らしていた英語の先生の独身女性で、二階に20歳と9歳の老犬二匹と暮らしています。私には、もと自分が住んでいたという一階部分を貸してくれました。キッチン、シャワールーム、ベッドルーム、居間が一続きになっていて、静かなひとり暮らしが保障されました。そこは三階建てで4世帯ぐらいが暮らす庭付き、ガレージ付きの典型的な郊外住宅でした。



【大家さんと2匹の愛犬と】

ご近所も仲良く、ある日その庭で遅くまでパーティが開かれ、私も仲間に入れていただき、ご馳走になりました。様々な料理を各家庭から持ち寄り、また魚介類や肉を男たちが炭火でグリルしてサービスしてくれ、おしゃべりが夜中過ぎても続くのです。私も、その前日学校のバスツアーで行ったキアンティのエノテカで買ったボックス入りの赤ワインを持って行きました。この瓶詰する以前のボックス入りワインが美味しく安いこともこの地で知りました。なんととってもトスカーナは、モンテプルチャーノ、キアンティ等々美味しいワインの宝庫です。これも美食とともに大のワイン好きの私には嬉しいことでした。

さて、この家からバスで10分、さらに城壁内の石畳の道を、あの美しい中世の街並み、教会や広場を通りつつ、カンポ広場のマンジャの塔を眺め、さらにドウオーモの壮麗な光景を眺めること15分、たっぷり朝から中世の空気を吸って歩いてようやく、最古の地区にある学校に辿りつくのです。毎日の日常が、こんなに贅沢でいいのかと思いました。本当に美しい街でした。

初日に試験があり、私はなぜかこの学校でい

つも一番上のクラスを持つ、最も厳しいと定評のあるディレトリッチェの先生のクラスに配属され、最後まで彼女の、ある意味厳しいけれど活気のある授業を受けることになりました。3か月でB2からC1のレベルまで到達し、教科書もほぼ二冊Allegro3から始まってViaggio nell'italianoをほぼ終えました。後半はMagariなども副読本に使いました。9時から3時間、30分の休憩を挟んでグループレッスン。(3人から7人)毎週教科書に沿ったテーマ(イタリアにおける家族、労働、教育等)があり、講読、聞き取り、文法、議論がありました。そりゃあ・・進むのは早かったです。

私は3か月いましたが、大人の職業人で2、3週間、イタリア語のブラッシュアップとバカンスを兼ねて来ているといった、イタリア文化好きの人たちがほとんどでした。国籍はイギリス、スペイン、ギリシャ、フランス、ドイツ、アメリカ、スイス、ベルギー、カナダ、メキシコ、オーストラリア……と多彩でしたし、職業も教師、弁護士、会社員、通訳、EU職員、研究者、牧師などの専門職の方が多く、その知識の豊富さや、なにより一家言持っていらっしゃることに圧倒されました。大いに刺激になり、興味深かったのですが、Yumi、日本ではどうなの？と振られる時はもう冷や汗もの……幸い日本人は私だけなので、適当にできるだけ簡単に答えていましたが……日本人で立派に意見の言える人が聞いたら……？と思うと面目ないです。長文理解の早さ、聞き取りの理解力とそれに見合う表現力、いつも彼らの自信を持った発言に感心していました。また其々がテーマを持ちプレゼンするという課題もありました。多岐にわたるテーマで、とても興味深かったです。

私は、なかなか彼らのレベルに到達できなかったものの、でも、欧米人の彼らは余裕で日本人の私に優しく、妙に、日本人なのにこんなにできるみたいに大げさに褒めて気落ちしないように支えてくれていました。いいクラスに恵まれ、必死で学びました。宿題も、予習も。

午後は2時から週に2回プライベートを取っていました。私に関心を持ち、翻訳したいと前から思っていたDacia Marainiの“La nave per Kobe”を熟読し、哲学専攻で彼自身も作家の若い先生Andreaに二時間みっちり解釈や説明してもらいました。彼もこの重層的な本に興味を持

っていて、知らないことをたくさん教えてくださいました。中身のさらに濃い午後の授業でした。

さらに、この学校では午後に映画やオペラのDVD鑑賞会、イタリア文化講座(料理、美術史、文学、オペラ等々)が週に2、3回開かれ、無料で参加できました。また近郊の街へのトリップや、ワイン・イタリア料理を味わう会などが安い価格で企画されていました。学校には料理コースもあり、シェフがいるので、美味しいcenaの企画があるというわけです。

また前述のようにパリオの季節だったため、この一大行事にまつわる準備期間中の聖なる儀式等々の意義を解説してくれ、また先生引率の下、教会やドゥオーモ、広場での一つ一つの儀式に参加することもできました。前日、当日の感極まる一連の行事に学生皆で参加したことは言うまでもありません。街の人々のこの行事に、文字通り生きがいにかけて取り組むこの祝祭的雰囲気熱さは、この街に住んでみないと分からないと思いました。



【パリオの様子】

中世から変わらない市民の魂が、小さな赤ちゃんから、少年、青年、大人、お年寄りまで、女も男も、ころを一つにして喜び合う…こんな信じられない光景が、まさに日常なのです。

コントラーダは、イタリアの強い家族の絆をさら

に地域へ拡大し強めたもののようです。イタリア人の歴史ある奥深さに触れた感じがしました。

今までボローニャとサレルノという異なった地域にミニ留学しましたが、今回のシエナ留学でイタリアが地域によって異なることや、歴史が今に生きていることも実感しました。

初めのうちは、不便で他の街へ旅に出にくいかと思いましたが、シエナは勿論街自体が美術の宝庫で観光地ですし、周辺にもサン・ジミニャーノ、ルッカ、フィレンツェ、ピサ、オルヴィエート、キアンティ、モンテプルチャーノ、アッシージ、エルバ島などの魅力的な場所があり、バスや電車で観光に行きました。バスがこんなに発達しているとは思いませんでした。

また遠方のプーリア、カンパーニャ、ローマへも直通バスがあって、快適にバス一本でバカンスにも行けました。私は南イタリアが好きで、なじみの地に1週間バカンスに行きました。

大家さんの Lucia もいい方で、車で二匹の犬と一緒にドライブがてらトスカーナの自然が広がる中の小さな街に連れて行ってくれたり、bar に aperitivo を呑みに誘ってくれたり、きつぷのいい、乗馬が趣味の綺麗な italiana でした。

厳しくて近寄りたいたいとも言われた先生の Alessandra は気強いお洒落なマダム風の italiana で、いつも私を気遣いつつ鍛えてくださいました。ふたりの italiane に Grazie!! です。

快適な我が家といい学校や先生たち、友達に恵まれ、充実した3か月でした。クリスマスには世界のあちこちのシエナ友達からクリスマスメールが届き、また旅を夢見ました。絶対きてねえ…と言われた国々もたくさん!!

最後に、このダンテ・アリギエリ校を薦めてくださり、手続きをして下さったイタリア会館にも本当に感謝しています。ありがとうございました。

(当館語学受講生)

イタリア発月刊日本語新聞

COMEVA?
Pubblicazione mensile distribuita in Italia e in Giappone

イタリア在住日本人と日本人観光客のための情報誌

編集・発行 NIPPON CLUB SNC
Via Torino, 95 - 00184 Roma, Italy
Tel. & Fax : (06) 4743. 212
E-mail : comeva@nipponclub.it
URL : www.nipponclub.it

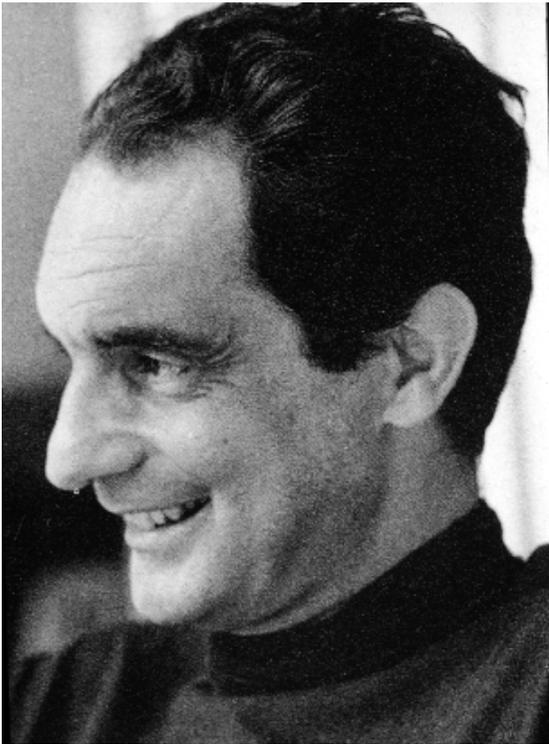
お問い合わせ等は NIPPON CLUB SNC 宛てにお送り下さい。

『カルヴィーノとアーティチョーク』

第2回

堤 康徳

家族のなかの黒い羊(pecora nera は「はぐれ者」、「変り種」の意)。イタロ・カルヴィーノは、科学者の家系でただひとり文学の道を志した自らを皮肉まじりにそう評したことがあった。



【イタロ・カルヴィーノ】

カルヴィーノ文学を読み解く鍵のひとつが、このような家庭環境のなかでも、とりわけ作家イタロと父親マリオとの関係にあると思われる。カルヴィーノの自伝的小説では、父子の関係が大きな重みをもっているが、『まっぴたつの子爵』(// *visconte dimezzato*, 1952) や、『木のぼり男爵』(// *barone rampante*, 1957) のような初期の寓話的な小説においても、実際の親子の葛藤の一端が投影されているのだろうか。『木のぼり男爵』の主人公ジモが樹上生活者になったのは、食卓のカタツムリ料理を断固として拒み、それを強要する父

親に反発したからだった。『まっぴたつの子爵』の主人公メダルドの父アイオルフォは、鳥を飼うことだけが生きがいの老人であり、かわいがっていたモズを息子に惨殺されて悲嘆のあまり死んでしまう。トルコ軍の砲弾を浴び、体を二分されて帰郷したメダルドは、モズの片翼と片足をもぎ、片目をつぶすことで、その死体に自らの刻印を押したのだった。メダルドの甥にあたる語り手の少年は、アイオルフォ子爵の娘である母と、その母が駆け落ちした密猟者の父とのあいだに、森の下の荒地の小屋で生まれているが、まもなく父親がけんかのために命を落とし、母もペラグラ病(18世紀からおもに北イタリアで流行した皮膚病。トウモロコシから作るポレンタを主食とする地域で多く発生した)で死んだため、祖父のアイオルフォ子爵に引きとられたのである。

しかし、自らの父親の思い出に触れたカルヴィーノの自伝的な著作から、まず浮かび上がるのはむしろ、農学者として、猟師として、自然を愛し、自然を知り尽くしていた父親マリオへの敬愛である。と同時に、息子と父とのあいだに存在した、埋めがたい距離感が意識されているのも確かだろう。父と息子のこのような距離感、両者の微妙な関係は、サン・レモ生まれのマリオ(1875-1951)が所有していた農地にまつわる記憶をとおして、最も鮮明になる。



【サンレモの海岸線】

カルヴィーノが少年期を過ごした、リグーリア州サン・レモは、入り江と山に囲まれた温暖な気候

で知られ、「花の町」(Città dei Fiori)とも称される。カルヴィーノ家の自宅は、市街を見下ろすサン・ピエトロの丘の中腹にあった。そこからさらに丘を登り、ラバ用の細い道を通ってようやくたどり着くサン・ジョヴァンニと呼ばれる土地に、一家は畑をもっていた。この農地については、「サン・ジョヴァンニの道」と題された短篇で詳しく述べられている。1962年にある雑誌に発表されたこの作品は、作家の死後出版された短篇集『サン・ジョヴァンニの道』(La strada di San Giovanni, 1990)に表題作として収められる。父親にとって、この土地は、自らの学問の実験場でもあり、また理想郷でもあった。そこでは、食糧難の時代に、自給自足を可能にするほどの野菜と果物が丹精をこめて栽培されていた。父親は、「夏も冬も五時に起きて、がさごと野良着をまとい、ゲートルを巻いて」、そこへ出かけてゆく。彼はまた、鳥の鳴き声をまねるのに長け(多くの動物が登場するカルヴィーノ文学で特権的な地位を与えられているのは鳥である)、動物の通り道を知り尽くした猟師でもあり、「犬か銃さえあれば、ピエモンテからフランスまで、森からまったく出ることなく」たどり着くこともできるのだが、息子のほうは、「草一本、鳥一羽も区別できない」。畑で獲れた新鮮な作物を、ラバに代わって運ぶのが、彼と弟の朝の日課だった(学校のある期間は免除されてはいたが)。息子たちは、この任務に、父親ほどの情熱は感じていなかったようである。サン・ジョヴァンニの畑の豊かな収穫物についてこんな記述がある。

私たちの沈んだ気持ちと、かごの中身の豊かさは対照的だった。その中身は、葡萄か無花果の大きな葉っぱの層で隠されていたが(他人の目を警戒して見られまいとする農民の習慣に従って)、歩うちに震動で覆いがはがれて、中から、緑のラップのようなズッキーニ、<修道女の太もも>という名の梨、サン・ジャンネ種のぶどうの房、無花果の実、ハヤトウリの硬い毛茸(もうじょう)、アーティチョークの緑紫色のトゲ、茹でてからかぶりつくマイス・ドゥルセあるいはスウィート・コーンの穂、ジャガイモ、トマト、牛乳やぶどう酒の大瓶、そしてときには、仕留められてすでに皮をはがれた一羽のウサギが顔をのぞかせていたが、固いものが柔らかいものを傷つけないように、しかも、オレガノやマジョラムやバジリコ

の株を置く場所も残るように、すべてが並べられていた。

サン・ジョヴァンニの畑で育てられたアーティチョークは、きっと頻繁にカルヴィーノ家の食卓にのぼったことだろう。それはさておき、このかごには、ジャガイモ、トウモロコシ、ズッキーニ、トマトなど、いまやイタリアの食生活に欠かせない中南米原産の作物が多い。ハヤトウリ(chayote)もやはり南米原産のウリ科の果実で、日本には最初に鹿児島に伝わったため「隼人の瓜」と呼ばれるようになったらしい。

おそらく形状が<修道女の太もも>(coscia di monaca)に似ていることからそのように呼ばれる果実は、カルヴィーノの勘違いなのか、梨ではなく、プラムの一種のようである。写真で見ると、確かに洋ナシにも似ている。想像力を逞しくすれば、なまめかしい女性の太ももに見えないこともない。その語源は不明だが、「修道女の太もも」と題されたフィレンツェに伝わる民話と関係があるのかもしれない。



【修道女の太もも”coscia di monaca”】

昔あるところに王と王妃がいた。王妃に子供ができないことが王の悩みであった。ようやく女の子を授かった王は、かわいさのあまり、高い塔を建てて、娘を閉じこめてしまう。この娘に、別の王の息子が恋い焦がれ、鳥に姿を変えて近づく。王女は、鳥が気に入り、つかまえて鳥かごに入れる。その夜、王子は鳥かごから出て人間の姿に戻り、王女に素性を明かす。父王は、娘の寵愛を受け

る鳥が気に入らず、窓から放り投げる。地面に投げつけられた王子の体内にはガラスが入り、病気になるが、どの医者もその病を治せなかった。絶望した彼の父親は、息子を治した者には、それが男なら多額の報酬を与え、女なら息子の花嫁にすると布告する。王女はいてもたってもいられず、塔を逃げ出し、王子に会いに行く。その途中、森のなかで、修道院の聖名祝日に祈りを捧げる修道女たちに出会う。祈りのあとの食事中に、院長が、「私の太ももを浅鍋に入れて炒め、その脂身を王の息子に塗れば、彼の体内からガラスがすべて出る」と言うのを王女は盗み聞きし、修道女たちがぶどう酒に酔って眠りに落ちると、院長の法衣をまくり、包丁で太ももの肉をたっぷりと切り取る。その脂身で王子を治した王女は、めでたく王子と結婚する。



この話は、ジュゼッペ・ピトレ (Giuseppe Pitre, 1841-1916) の『トスカーナ民間短篇物語集』 (*Novelle popolari toscane*, 1885) に収録されてい

る。院長の太ももは、以外にも充実した修道院内の食生活の証しでもあろうが、それを切断するという行為は、魔術的でどことなく性的な秘儀の匂いがする。ピトレやコンパレッティらによる民俗学研究の成果を土台にして、1956年に『イタリア民話集』 (*Fiabe italiane*) を編纂・出版したカルヴィーノは (イタリア全国から選ばれた 200 篇は、作家自身の手によって方言からイタリア語に書き直されている)、この話を自らの民話集には採録していないが、当然よく知っていたはずである。民話の世界で彼自身がとりわけ魅了されたのは、簡潔でスピーディーな語りだったというが、カルヴィーノ文学の森が、民話的な想像力をその豊潤な養分としていることは確かだろう。『イタリア民話集』には、『まっふたつの子爵』に着想を与えたかもしれないヴェネツィアの昔話「まっふたつの少年」 (*Il dimezzato*) も収録されている。

『イタリア民話集』に付した解説のなかで、カルヴィーノは、民話の本質のひとつが、「人、動物、草、物、すべての一体性と、存在するものすべてが無限に変容する可能性」にあると指摘している。ここには、「野生の森という、非人間中心的な宇宙と向かい合ってこそ (そこにおいてのみ) 人間は人間となる」 (「サン・ジョヴァンニの道」) と考えていた父親の世界観が共鳴している。

(慶應義塾大学非常勤講師)

… 会館 だより …

イタリア語検定 直前講習会

3月7日(日)に行われる実用イタリア語検定の本番に向けて、よく出題される文法事項や日本人がひっかかりやすいポイントを懇切丁寧に指導します。

・日時: 2月21日(日)

- ①5級向け: 10:30~12:00
- ②4級向け: 13:00~14:30
- ③3級向け: 15:00~16:30
- ④3級作文模試: 16:30~17:00

・費用: 2科目 一般・受講生 3,000円
維持会員 1,500円
1科目 一般・受講生 2,000円
維持会員 1,000円

※3級作文模擬試験は一般・受講生、個人維持会員 共 1,000円

・会場: 日本イタリア京都館 本校
・講師: 杉 栄子 (当館イタリア語講師)

編集・発行 / (財) 日本イタリア京都館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: <http://italiakaikan.jp/>